

第2節 讃岐系土器について

はじめに

今回の調査で、南方遺跡から出土した遺物の多くは弥生時代後期末を中心とする土器である。その中には岡山県南部の土器とは異なり、他地域から搬入された可能性があるものが含まれている。器種は甕が6点（110・121・139・168・305・315）あり、讃岐系と呼称されている中でも形態・調整技法・胎土において「香東川下流域産土器」⁽¹⁾の諸特徴を示している。本稿では讃岐地域からの搬入土器について検討し、南方遺跡の位置づけを行う。

1. 香東川下流域産土器について

「香東川下流域産土器」は、弥生時代後期の讃岐地域、特に高松平野の香東川下流域で製作されたと考えられる土器群である。従来、播磨灘沿岸地域を中心に出土例が多く、「播磨系土器」・「雲母土器」と認識されていた土器の一群である⁽²⁾。香川県内の発掘調査事例の増加に伴い、この土器群が高松平野で比較的高い比率で出土した。また、丸亀平野の下川津遺跡で「下川津B類土器」⁽³⁾とされるものもこの土器群に含まれる。製作地は、高松平野中央部の香東川下流域の一角の半径5～6kmの範囲であり、素地粘土採取地が石清尾山西南麓に推定されている⁽⁴⁾。特徴は、比較的精選された胎土中に微細な角閃石を多量に含み、色調は灰褐色～暗橙色を呈するとされている。

2. 出土土器の概要

袋状土壙から出土している讃岐系土器は6点確認できる。諸特徴を示すと、口縁部は強く折り返し、やや水平気味にのびる。端部は肥厚し、やや上方へ摘み上げられる。端面にはナデ調整により擬凹線文（110・168・305）と無文のものがみられる。頸部は内外面ともにヨコナデを施す。胴部外面は全体をタテハケ調整後に、底部から下半部にかけて縦方向のヘラミガキを加えている。また、外面調整で110は断続的なタテハケであり、305と同様に縦方向のヘラミガキが省略されているものもみられる。内面は底部から胴部最大径付近までヘラケズリを行い、上半部は指頭圧痕が残る。完形に復元できる110・168では肩が張り、胴部下半が膨らみ、球形化している。底部はわずかながら平底を止め、連続して立ち上がる。胎土の色調は、灰黄褐色から茶褐色をなしており、おおむね茶系統を呈している。胎土中には微細な角閃石を多量に少量ながら金雲母も含有している。しかし、139は形態・調整では共通しているが、胎土の色調は細粒を含む橙色をしており、他の5点とは異なる様相を示している。徳島県矢野遺跡⁽⁵⁾の出土資料に類似している。以上の諸特徴から5点の土器は「香東川下流域産土器」であり、うち110・168・315は下川津B類土器である⁽⁶⁾。

時期については、110・121が袋状土壙から出土している在地産の二重口縁甕と共伴しており、後・IV（オノ町Ⅰ～Ⅱ式併行）である。讃岐地方の下川津Ⅳ式に併行するものと考えられる⁽⁷⁾。

3. 旭川流域の讃岐系土器

岡山県内における香東川下流域産土器の出土遺跡は南部地域を中心に分布を示している。高松平野の推定製作地から半径50km圏内に県南部の拠点集落が含まれている。搬入状況は管見の範囲によると22遺跡140点に及び、時期は後・Ⅲ～占・Ⅰにみられる。ここでは、南方遺跡が位置する旭川流域の香東川下流域産土器の出土事例について述べる。旭川流域では、当該資料の遺跡数は10遺跡59

点と岡山県内では最も多く認められる地域⁽⁸⁾であり、東岸域と西岸域に区分できる。

東岸域は、6遺跡38点の出土事例がある。雄町遺跡では後・Ⅳの広口壺が1点出土している。百間川遺跡群では37点と流域全体の64%を占める。原尾島遺跡では後・Ⅳで甕10点・細頸壺1点、古・Ⅰで甕1点が出土している。沢田遺跡では甕4点がみられる。兼基遺跡では後・Ⅲ～Ⅳと甕2点、今谷遺跡では包含層から広口壺1点・甕6点が出土している。米田遺跡では後・Ⅲ～Ⅳにかけて広口壺4点・甕6点が出土している。古・Ⅰに井戸から大型の片口鉢があり県内では1例のみである。

西岸域は、4遺跡21点の出土事例がある。津島遺跡では後・Ⅲ～Ⅳにかけて広口壺1点、甕7点が出土している。伊福定国前遺跡では後・Ⅳで広口壺1点、甕1点がある。鹿田遺跡では後・Ⅳで甕6点がみられ、古・Ⅰには播磨系土器が顕著になることが指摘されている⁽⁹⁾。

出土する器種は甕が最も多く、広口壺・細頸壺・大型の片口鉢が認められるが、高杯・複合口縁壺・小形丸底壺、台付小形丸底壺、鉢の搬入は現段階では認められない。搬入時期は後・Ⅲから受容がみられ、継続的に後・Ⅳで最盛期を迎え、古・Ⅰで甕3点と減少傾向を示す。

4. 模倣品の搬入（第224図）

旭川流域の出土している搬入土器の中には、調整技法・胎土においてやや異なるものが、2遺跡7点で認められる。

先述したが、南方遺跡出土の甕16・17は胎土に角閃石を多く含有するが、調整技法に下川津B類土器の外表面調整はタテハケのち下半の縦方向のヘラミガキであるのに対して、胴部下半のはヘラミガキを省略している。

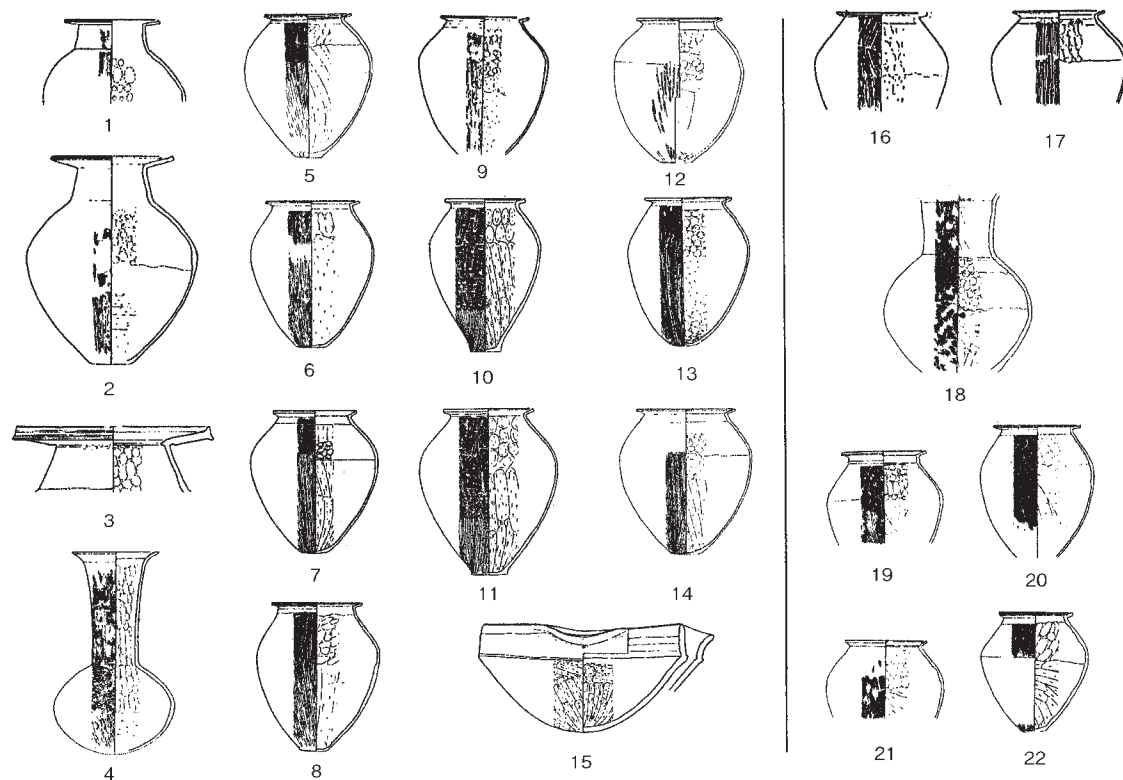
津島遺跡⁽¹⁰⁾の河道1出土資料がある。広口壺18は形態・調整技法は香東川下流域土器であるが、胎土には雲母を含む。甕19は外面調整にヘラミガキを省略している。甕20・21は外面調整にヘラミガキを省略し、胎土には雲母を含む。甕22は器壁がやや厚く、胎土に雲母を含む。

以上、讃岐系土器として搬入されている中にも数点ではあるが香東川下流域産土器を模倣した個体も含まれている。高松平野中央部の製作圏外に模倣品を製作する集落の存在が指摘されており⁽¹¹⁾、複数の製作地からの搬入の可能性があると考えられる。

おわりに

本稿では、南方遺跡出土の土器を通して、讃岐系土器の搬入状況について考えてみた。従来、旭川流域出土の讃岐系土器とされていたもの多くは高松平野の香東川下流域産土器であり、南方遺跡・津島遺跡での模倣形態の土器も少量ながら搬入されていることが判明した。南方遺跡では讃岐系土器の他に阿波地域からの搬入品と考えられる土器の存在している。また、県南部地域では、古・Ⅰ（下田所式）に香東川下流域産土器の受容量が低下するが、逆にこの時期以降から高松平野も含めた讃岐地域全体への古備系土器の出土が数量的に増加する傾向⁽¹²⁾にあることは注目される。今後、他地域を含めた上で、比較検討していかなければならないであろう。（水田）

この節を成すにあたり、高松市教育委員会の大嶋和則、山元敏裕の各氏から多くの教示をいただきました。また、高畑知功・渡邊恵理子・米田克彦・河合忍・石田爲成の各氏をはじめとする岡山県古代吉備文化財センター職員の諸氏には様々な機会において有益な助言を頂きました。木筆ながら感謝の意を表します。



雄町遺跡 (1) 百間川今谷遺跡 (2・9) 伊福定国前遺跡 (3) 百間川原尾島遺跡 (4～6) 百間川沢田遺跡 (7) 百間川兼基遺跡 (8) 百間川米田 (当麻) 遺跡 (10・11・15) 鹿田遺跡 (13・14) 南方遺跡 (16・17) 津島遺跡 (12・18～22)

第224図 搬入土器の諸形態 (1/12)

註

- (1) 大久保徹也「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社 2003
- (2) 石野博信「川島遺跡 20 溝の土器について」『川島・立岡』太子町教育委員会 1971
今里幾次「播磨の雲母土器」『考古学研究』第23巻第4号 1977
- (3) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』香川県教育委員会 1990
- (4) 森下友子「胎土1類土器について」『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会 1994
- (5) 近藤玲『矢野遺跡 (I)』(財)徳島県埋蔵文化財センター 2002
- (6) 大嶋和則氏の御教示による。
- (7) 前掲註 (3)
- (8) 草原孝典「吉備における庄内併行の土器」『庄内式土器研究』IX 庄内式土器研究会 1995
- (9) 山本悦世「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の上器」『鹿田遺跡 I』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (10) 島崎東ほか「津島遺跡 4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』173 岡山県教育委員会 2003
- (11) 大嶋和則「高松平野の集落間における庄内併行期の土器様相」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会 2003
- (12) 信里芳紀「四国地域における吉備系土器の分布」『庄内式土器研究』XXV 庄内式土器研究会 2001